

明石川と共に生きる

～今後は外来魚のように在来魚の脅威になるかも知れない季節来遊魚～

西岡龍之介、佐野こころ(玉一アクアリウム)

私たち兵庫県神戸市立玉津第一小学校の玉一アクアリウムは、在校生の小学3年生から卒業生の大学生まで約30人が活動しています。

私たちは、校区内を流れる明石川で「明石川と共に生きる」という思いで、1年を通して1週間に1～2回は明石川水系の源流～河口までモニタリング調査をして、外来種の駆除と在来種の保護を行い生物多様性保全活動をしています。

調査をしている明石川下流～河口で数年前から急に熱帯性の季節来遊魚や季節来遊の生き物が増えてきました。

季節来遊とは、生まれた所とは違う海域にたどり着き、寒さなどの季節の変化によって動きが鈍くなり食べられたり餌が摂れなくなって死んでしまう生き物のことです。

以前は死滅回遊と呼ばれていましたが、死滅という言葉の印象が悪く自分の力で回遊していないことから、今は季節来遊と呼ばれるようになりましたが、死滅しているのは事実で遊びに来ている訳でもないの、玉一アクアリウムでは死滅回遊の方がいいというのがみんなの意見です。

私たちの調査の結果、季節来遊の生き物の産卵場所が熱帯域ではなく日本近海になっている可能性が出たり、一部が死滅せずに明石川下流で成長していることもわかってきました。

季節来遊魚のクロホシマンジュウダイは、以前は明石川下流～河口で毎年秋～冬に幼魚が数匹捕れる程度でしたが、2023年は1度に40匹の幼魚が捕れたり、頭に角が生えているとても小さな幼魚も捕れ、季節来遊魚のイセゴイやヨウジウオの仲間のテングヨウジも毎年のように捕れています。

2024年10月には神戸市東灘区の住吉川で行った調査では、河口でヨウジウオの仲間のガンテンイシヨウジも初めて捕れました。

また、季節来遊の生き物のオオヒライソガニ属は、2023年11月にインド洋や沖縄などから流れ着いたメガロパ幼生が明石川下流で何10匹も捕れて、12月には幼体に変態し春まで成長を続け、熱帯性のオオヒライソガニ属は明石川下流で成長しながら1年間を過ごし、成長段階が違う様々な個体が明石川下流で1年中見られることがわかりました。

これは、明石川下流の近くにある下水処理場の温排水が流れてきていることも関係していると思います。

このような状況から今の明石川下流～河口は、季節来遊魚や季節来遊の生き物の定着初期だと感じています。

私たち人間が持ち込んだ外来生物は、在来生物にとって脅威ですが、私たち人間の生活で地球温暖化や海水温上昇などによって季節来遊魚や季節来遊の生き物が増えて定着したら、在来生物にとって同じように脅威になるはずで。

生態系だけでなく漁業への影響も心配で、これからも明石川下流～河口でも、環境の変化を早く知るために調査を続けます。